昭和34年4月21日第三種郵便物認可　平成27年9月17日発行（木曜日発行）（9月10日発売）第57巻第35号

週刊文春

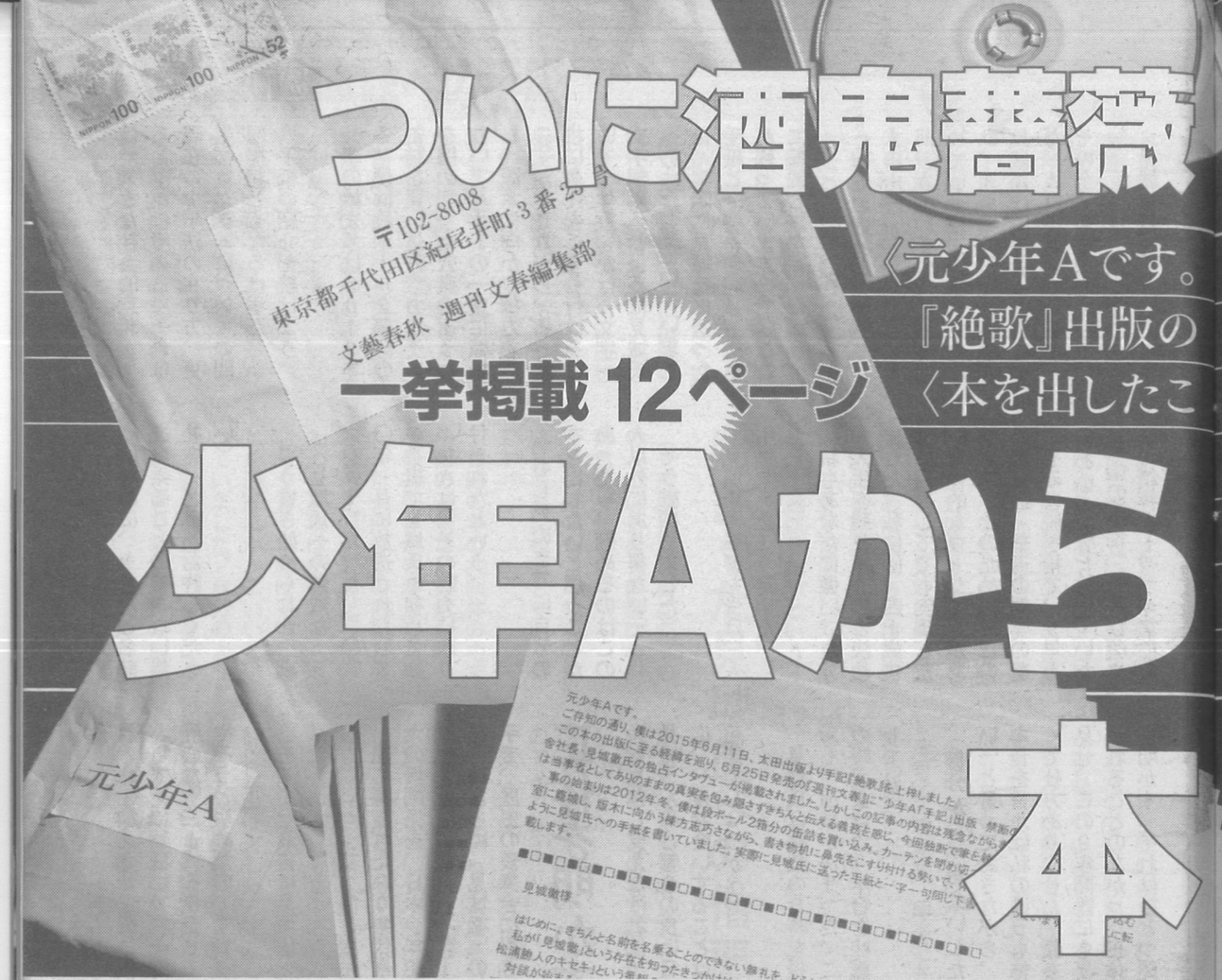
9月17日号　定価400円

ついに酒鬼薔薇聖斗の正体を見た！

〈元少年Aです。『絶歌』出版の〈本を出したこ〉で始まる2万字に及ぶ手紙。経緯を報じた本誌記事に抗議した上で、とを後悔もしていません。〉と断言。文末には〈重要なお知らせ〉として、大きな活字で「オフィシャルホームページ」開設の告知がある。そこには本人の身長・体重、アドレスとともに全裸でナメクジにまたがる異様な"自撮り写真"が――。

一挙掲載 12ページ

少年Aから本誌への手紙



差出人は「元少年A」

A4・20枚の手紙

14歳の時、事件を起こした

〈元少年Aです。
ご存知の通り、僕は2015年6月11日、太田出版より手記『絶歌』を上梓しました〉（以下、ゴシックはAの手紙からの引用）

八月三十一日、本誌編集部に一通の封書が届いた。差出人は〈元少年A〉。中に入っていたのは二つ折りにされたA4用紙二十枚のワープロ打ちの手紙。そして、それと全く同じ内容のワードファイルが保存された一枚のDVD-Rだった。

言うまでもなく元少年A（33）とは、一九九七年に十一歳の少年と十歳の少女を殺害した神戸連続児童殺傷事件の犯人である。二〇〇四年三月十日に関東医療少年院を仮退院し、社会復帰してから、彼がどこで何をしているのかは、謎に包まれていた。

事件から十八年を経た今年六月十日、Aは突如甦った。手記『絶歌』が太田出版から発売されたのだ。事件の詳細や社会復帰までの日々を綴った同書は大きな話題となり、現在は二十五万部まで版を重ねている。

〈きちんと伝える義務を感じ〉

だが、同時に厳しい批判を浴びることにもなった。出版にあたり、Aは被害者遺族に何の連絡もしていなかった。自らは匿名のまま、殺人事件の犯人が手記を刊行し、印税を得ることの是非や残額が一億円を超える賠償金の支払いに印税を充てることを明記していなかった点も、論議を呼んだ。

だが、Aはそうした渦中にあっても、コメントを出すこともなく、頑なに沈黙を守り続けていた。そのAから、本誌に手紙が届いたのだ。

本誌は『絶歌』刊行直後の六月二十五日号（六月十八日発売）において、出版の経緯を詳報した。当初、手記執筆をサポートしていた幻冬舎の見城徹社長が取材に応じ、出版を断念した理由や、太田出版の岡聡社長にAを紹介した事情について明かしている。

この記事がAの琴線に触れたことは間違いない。冒頭で紹介した書き出しに続けて、手紙にはこう記されている。

〈この本の出版に至る経緯を巡り、6月25日発売（編集部注・十八日の誤り、以下同）**の『週刊文春』に〝少年A「手記」出版 禁断の全真相〟と題された、幻冬舎社長・見城徹氏の独占インタヴューが掲載されました。しかしこの記事の内容は残念ながら事実とは異なっていました。僕は当事者としてありのままの真実を包み隠さずきちんと伝える義務を感じ、今回独断で筆を執らせていただきました〉**

だが、そもそも、この手紙は本当にA本人が書いたものなのだろうか。

取材を進めると、二つの点から、「本物」であることが確認できた。

第一に、本誌は六月に見城氏に取材をした際、二〇一二年冬にAから届いた手紙の文面を克明に明かされている。記事に掲載したのはその一部であったが、今回Aから届いた手紙には、六月二十五日号の誌面では紹介していない部分も含まれていた。そして、その文言は本誌が把握していたものと完全に一致した。

第二に、あるルートを通じてA本人が本誌に手紙を送った事実を確認することができた。

本誌は、二万三千字を超えるAからの手紙のほぼ全文を公開することを決断した。

日本中を震撼させた殺人事件の当事者が自ら綴った手紙は、その内面に迫る上で第一級の資料である。しかもAによれば、本誌が報じた『絶歌』出版の経緯は事実と異なるというのだ。彼がなぜ手記を書いたのか、改めて検証する必要があるだろう。

『絶歌』出版により、Aの更生や遺族への贖罪意識には大きな疑義が生じている。ならば尚更、「少年Aとは何者なのか」を改めてこの手紙を基に読み解くことに

は、大きな社会的意義があると本誌は考える。それは現在の少年法の在り方、更生プログラムについての問題提起ともなるはずだ。

手紙の紹介を続けよう。

〈事の始まりは2012年冬。僕は段ボール2箱分の缶詰を買い込み、カーテンを閉め切った穴蔵のような狭いアパートの一室に籠城し、版木に向かう棟方志巧（注・功）さながら、書き物机に鼻先をこすり付ける勢いで、体重をかけ一文字一文字刻み込むように見城氏への手紙を書いていました。実際に見城氏に送った手紙と一字一句同じ下書きが残っていますので、ここに転載します〉

前述の通り、『絶歌』が太田出版から刊行される前、Aは幻冬舎で執筆を進めていた。そのきっかけは、Aが、二〇一二年冬に見城氏に出した手紙だった。Aは本誌への手紙で、その全文を再録している。

〈見城徹様

はじめに、きちんと名前を名乗ることのできない無礼を、どうかお許しください〉

こう書き始められた手紙は、見城氏への熱烈な〝ラブレター〟だった。二〇一〇年一月に放送されたBSの番組で見城氏を初めて知ったAは、その魅力に取り付かれたという。

〈「もし死ぬまでに自分の本を出したいと思うことがあったら、頼めるのはこの人以外にあり得ない」そう直感しました〉

見城氏の影響を受け、人生プランをこう定めた。

〈私もあなたに倣い、自分の人生を残り10年と決めました。私には、四十歳までに何としてでも実現したい具体的なヴィジョンがあります。そのために、この暑苦しい「普通の羊」の着ぐるみを脱ぎ捨て、9年もの〝あいだ封じ込めていた〟異端の本性〟を呼び醒まし、精神をトップギアに入れ、命を加速させ、脇目もふらず死に物狂いで「一番肝心な」三十代を疾走してやろうと決めたのです〉

そして、最後に見城氏を〝挑発〟する。

〈闇に葬られた90年代最大の異端児を、日本少年犯罪史上最悪のモンスターを、他ならぬ「見城徹」の手で、歴史の表舞台に引きずり出してみたいとは思いませんか？〉

正体を明かすことへの恐怖

年が明けた二〇一三年一月十七日、見城氏から返信が届いた。元少年Aという著者名で本を出す気持ちはないこと、フィクションもしくは実録暴露物ではないノンフィクションでなら出版は可能かもしれないとの趣旨だった。返信を受け、Aはこう返答した。

〈もし差し支えなければ、見城さんのご都合の良い日に、一度お会いすることは可能でしょうか？〉

見城氏は複数の日時を提示し、面談が決まった。この時、Aはこう本音を吐露している。

〈自分から「お会いしたい」と言っておきながら、本音を言えば私のほうも怖くて仕方ありません。顔を見せ、この9年間誰にも暴かれることのなかった正体を明かす。それはひとつ間違えれば取り返しのつかないことになりかねません〉

世間の目を忍んで息を潜めるように生活してきたAにとって「元少年Aとして」誰かに会うのは恐怖を伴うことであった。しかしAは執筆への熱意を抑えきれず、幻冬舎の会議室で両者が対面したのは二〇一三年初頭のことだった。

Aが幻冬舎に赴くと、見城氏と編集者三名の「プロジェクトチーム」が待っていた。

この面談から約一年たった二〇一三年の年末、Aは原稿を完成させた。それからは、細かな修正を繰り返し、見城氏や編集チームとの面談も経て、二〇一四年冬、最終的な修正を終えた原稿のデータをAは幻冬舎に送った。ただ、出版の目途はたたなかった。

そして今年一月、重大な転機が訪れる。一月二十二日に発売された「週刊新潮」（一月二十九日号）で手記出版計画が報じられたのだ。記事の中では出版を否定する見城氏のコメントも掲載されていた。この事件は、Aの心を大きく揺さぶった。Aは手紙で、この時の心境をこう明かしている。

〈この記事を受け、僕自身、「本当にこの本を出すべきだろうか？」と自問自答するようになりました。いろいろ考えた末、手記の出版をきっぱりと諦めようと思い、編集チームにその旨をメールで伝えました。

そこから4日後の2015年1月26日の昼過ぎ、外出中に編集チームのメンバーから電話があり、以下の話をお聞きしました。

「見城は、うちから出すのはもう難しいけど、でもやっぱりこの本は世に問うべきだと思う。『このまま出版を断念すれば活字文化の衰退になる』、とまで言っています。最近、毎日のように見城から電話がかかってくるんです。見城は太田出版の岡社長と親交があり、Aさんさえ良ければ、太田出版からこの本を出してもらえるよう、岡社長に話すつもりのようです。岡社長に原稿を見せていいかどうかAさんに確認してくれと言われました。いかがですか？」

僕が太田出版と岡社長の名前を聞いたのはこのときが初めてです〉

手紙では、この直後から見城氏への批判が始まる。

〈見城氏は文春の記者のインタヴューに『太田出版を含めた三社を彼に提案した』と答えていますが、これは虚偽です。僕は太田出版以外の出版社の社名を見城氏からも他の編集チームのメンバーからも一度も聞いたことはありませんでした。おそらく見城氏は、出版のために彼自らが積極的に動いた事実を隠すために、『三社を提案してAに任意で選ばせた』というイメージを世間に植え付けたかったのでしょうが、そんなみみっちい嘘をついてまで自分だけ無傷で逃げおおせたかったのかと呆れ返ったものです。

僕はこのときは、

「済みませんが、即答できません」

と答えました〉

Aは迷っていた。

〈一度は出版を諦めたものの、この日を境に僕は心が揺れ動きました。

というのも、この頃の僕は見城氏に心酔していたのです。

「百匹の羊の共同体の中で一匹の過剰な、異常な羊、その共同体から滑り落ちるたった一匹の羊の内面を照らし出すのが表現だ。そのために表現はある」

そう言ってのける彼のことを最高にかっこいいと思っていました。自分のような異端者にとって、彼こそはメシアであり、彼の創った幻冬舎は、呪われた異端者たちにとってのノアの方舟である、と信じて疑いませんでした。

〝見城さんがそこまで言うのであれば……〟

僕は決心し、それまでに書いた原稿をもう一度最初から読み返して細かな修正を施し、さらに少年院仮退院後、友が丘（注・事件現場）に行った際に撮った街の風景の写真も文中に挿入し、自分にとって完璧な状態に仕上げました。

こうして最終調整を終えた『絶歌』の原稿を携え、2015年春、都内のホテルでの最後の打ち合わせに赴きました〉

始まった見城氏への憎悪

見城氏との最後の対面となったこの打ち合わせを契機に、Aは見城氏を激しく憎悪するようになった。

何がAを怒らせたのか。

〈僕は、再び出版を決意したことをまだ見城氏やチームのメンバーには伝えていませんでした。文春の記事によれば、見城氏はこの最後の打ち合わせで「手記を出せないことを通告するつもりだった」と話していますが、これも虚偽です。1月26日に編集チームのメンバーからもらった電話とメールで既に幻冬舎から出せないことは知っていましたし、何より僕自身、「手記の出版を諦める」という意向を伝えたまま、再び出版を決意したことを見城氏にもチームの誰にも話していませんでしたので、わざわざここで改めて僕に「手記を出せないことを通告する」必要がどこにあるでしょうか。実際は、「太田出版から手記を出すように何とかAを説得するため」に設けられた打ち合わせだったのです。事実、見城氏はこのときすでに太田出版の岡社長に『絶歌』の企画を話しており、この日僕と会うことも事前に岡社長に伝えていました〉

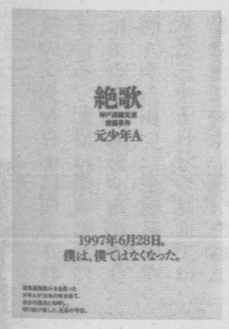
Aは打ち合わせの冒頭で、太田出版から手記を出版する意向を幻冬舎側に伝えた。

〈見城氏が到着して打ち合わせが始まると、僕は開口一番、

「これまで書いたものを最初から読み返し、自分にとって完璧な状態に仕上げました。太田出版から出させてください」

と言いました。

見城氏がこのとき〝耳を疑った〟のは、〝太田出版から出版するよう説得する必要がなくなった〟からです。



『絶歌』の著者名も「元少年A」

ついに酒鬼薔薇聖斗の正体を見た！

少年Aから本誌への手紙

次号9月24日号は9月16日（水）発売！定価400円です

Aを怒らせた本誌記事

ついに酒鬼薔薇聖斗の正体を見た！

少年Aから本誌への手紙

僕は続けてこう言いました。

「事件後、友が丘に里帰りした際に写真をたくさん撮っていたので、文中に挿入しています。僕としては、少年Aと一緒に友が丘の街を歩くという臨場感を読者に味わってもらうために、この写真はすべてカラーで載せてほしいのです」

見城氏は、文春の記者にはこのとき僕が見せた友が丘の写真について、

「『これはやめたほうがいいな』という写真だったから、案の定、『絶歌』でも載せていないね」

と語っていますが、実際は彼は文章と同時進行で写真を挿入するという案に僕以上に乗り気で、僕の左隣に座っていた編集チームメンバーに、

「おい、メモだ、メモを取れ」

と指示し、僕はそのメンバーに挿入する写真の点数と、どの章にどのようなレイアウトで挿入するつもりかを伝えました。

別の編集チームのメンバーがこの案に対し、

「カラーで挿入するのは難しい。できるとしても写真だけ独立した形で掲載することになると思うよ」

と意見を出すと、見城氏はすかさず、

「文章と同時進行で掲載しないと効果が半減するだろう。写真を挿入する章だけ四色刷りにすればいい」

と言っていました。

「これはやめたほうがいいな」と僕にアドバイスしてくださったのは、本当は太田出版の岡社長です。

僕はひとまず仕上げた原稿と、テキストデータと挿入写真のデータを収めたディスク、太田出版の岡社長に宛てた手紙を見城氏に託しました。

見城氏は満足気な笑みを浮かべ、僕にこう言いました。

「いやぁ～、拍子抜けしたよ。もう君は出すつもりがないと思ってたから。それを想定して、君に言うつもりだったことがあるんだけど、それはもういいか？それとも聞いておくか？」

「聞いておきます」

僕が答えると、彼はつづけました。

「週刊新潮の記事が出たあと、君から『関係者を悲しませたくない。出版を諦めます』ってメールがきたじゃない？　俺あのとき正直、心底ガッカリしたんだよ。

なんだよ？　そんなもんなの？　ここまで身を削るようにして書いておきながら、『その程度のこと』で諦めちゃうの？　君の想いなんてそんなもんだったの？　って。

再現映像のような描写力

僕の左斜め向かいに座っていたメンバーは、

「この原稿が、今ここに『在る』っていうこと自体が凄いことだと思います。出されるべきです」

と答えました。

僕の左隣に座っていたメンバーは、

「これまでメール交換でもお伝えしていましたけど、やっぱりこの本は世に問うべきだと思います」

と答えました。

テーブルの右端に座っていたメンバーは、

「これはフィクションとして出しても意味がない」

と答えました〉

この直後、太田出版の岡社長とAは出会う。まるで映像を再現するかのような臨場感のある描写で、Aはそのシーンを綴っている。

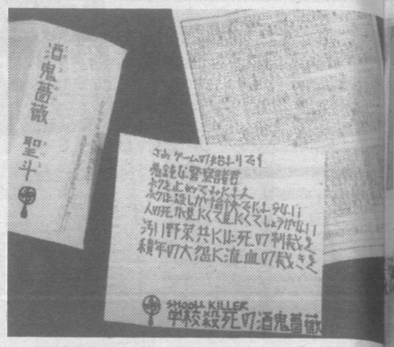
〈それから話は、太田出版の岡社長のことに及びました。

「実は太田出版の岡には、もうずいぶん前から君のこと話してるんだよ。今日会うことも伝えてある」

「岡さんには僕のことをどこまで話しているのですか？」

「君とコンタクトを取って、本の出版のための編集作業を続けてきたこと。君が事件のあと本当に後悔して、苦しんで苦しんで、毎日胸を掻き毟るようにして必死に生きてきたこと。原稿は文学としても優れていて、これは絶対に世に問うべきだ、もしうちで出せなくなったら、そのときは太田出版から出してもらえないだろうか、っていう話をしている。どうだ？　この僕の君への理解は合っているか？」

中学校の校門に首を遺棄



神戸新聞社に送った手紙

「はい。よく理解して、伝えてくださっていると思います。それで、岡さんは何と言っているのですか？」

「彼も『是非やりたい』そうだ」

実際は、太田出版の岡社長は「是非やりたい」などとは言っていません。岡社長は、

「幻冬舎で編集作業を続けてきたのであれば、それは幻冬舎から出されるべきです。それに、少年Aが書いたというだけで出すことはできません。まずは原稿を読んで検討しないと何とも言えません」

と、飽くまで『編集者』として至極真っ当で、誠実な対応をされていました。

見城氏は唐突に、

「どうだ？　今日これから岡に会ってみないか？」

と言い出しました。

僕は、まさかこの日岡社長にお会いすることになるとは予想しておらず、内心動揺しました。

まずは見城氏を介して岡社長に原稿と手紙を渡し、その後メール交換等で話が進んでいくのだと何となく考えていたからです。

「岡社長は、呼べばここへ来ていただけるのですか？」

僕が尋ねると見城氏は携帯電話を取り出しながら、

「来てくれるよ。今電話してみるか？」

別れの場面でAの怒りは頂点に

余りに長い年月正体を隠して生きてきたため、僕は未知の他人と『少年A』として会うことに並々ならぬ恐怖心を抱いていたのです。

見城氏は、既に電話に出られていた岡社長に、

「ちょっとこのまま待ってくれる？　切らないでよ？」

と伝え、一旦電話を置きました。

僕は見城氏に聞きました。

「例えばですけど、幻冬舎を介して、岡社長とお会いせずに出版するということもできるのですか？」

見城氏は答えました。

「別にできるよ。そういうパターンで出版される本もあるからね」

僕は続けて問いました。

「でも、それだと迷惑になるかもしれませんよね？」

「迷惑だよ。できなくはないけどね。でもさぁ、本の出版をお願いする会社の社長だよ？　君も会えばわかるけど、絶対信頼できる人だよ。

みんなはどう思う？　会うべきかどうか。

もう遠慮しないでいいよ。ここはガチンコで本当のことを言ってよ」

見城氏に意見を求められた3人のメンバーはそれぞれ、

「会う『べき』だと思います」

「会ったほうがいいと思います」

「会わなきゃ何も始まらないでしょ」

と答えました。

僕はここにきて、4人がかりで説得されるような形でようやく岡社長にお会いする決心がつき、

「わかりました。お会いさせてください」

と見城氏に伝えました。

文春の記事にあるように『太田出版の社長にどうしても会いたい』と僕のほうから言い出したわけではありません。

見城氏はもう一度チーム一人ひとりに、

「いいか？　本当にいいか？　もう後戻りできないぞ？」

と興奮気味に確認した上で、岡社長に、

「今日入ってる予定を全部キャンセルして、今すぐタクシーに飛び乗って＊＊ホテル＊＊号室まで来てくれ」

と伝えました。

間もなく岡社長がホテルに到着しました。

これが、僕と岡社長との出会いです。

岡社長は軍人を思わせる偉丈夫で、強靭な肉体と柔軟な思考力を併せ持ち、『柔らかい鋼鉄』と評したくなるような、未だかつて遭遇したことのないタイプの魅力的な人物でした。何より、僕のような『はぐれ者』に対する愛に満ち溢れ

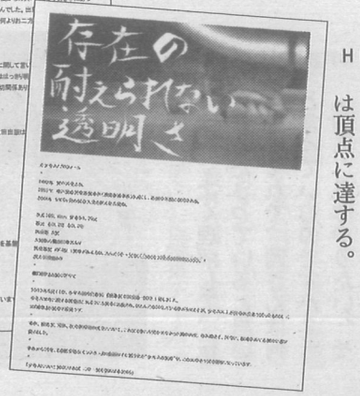
Aのセルフポートレート（HPより）

次号9月24日号は9月16日(水)発売！定価400円です

ていました。もし見城氏よりも先に岡社長の存在を知っていれば、最初から岡社長に出版を希望する手紙を送っていたことは間違いありません。

僕と岡社長を引き合わせると、見城氏と幻冬舎の編集チームは退室しました〉

ここに至り、『絶歌』出版は幻冬舎から、太田出版の手に委ねられた。Aからの最初の手紙が見城氏に届いてから二年以上が経過していた。そして、見城氏との別れの場面で、Aの怒りは頂点に達する。



HPのトップページ

HP開設を宣言

〈帰り際、見城氏は僕のほうへ歩み寄り、

「まぁ、柄じゃないんだけど……」

と、〝恥ずかしそうに右手を差し出し、僕に握手を求めてきました。

手を握りながら彼は僕の肩を気合いを入れるようにポンッと叩き、

「頑張れよっ！」

と言って出て行きました。

このときの光景を思い出すたび、身体の奥底から悲しみと怒りと悔しさのトルネードが巻き起こり、内臓を振じ切られるような思いです。

人は、これから裏切る相手と、あんなに晴れやかな顔をして握手を交わせるものなのか……

このときの見城氏ほど醜い顔をした人間を、僕は見たことがありません〉

Aは、見城氏から「利用され捨てられた」と思い込んでいるようだ。見城氏が取材に応じた本誌記事の発売後、幻冬舎側から、なんの連絡もなかったことにも怒りを露にしている。

〈『それ以降、Aとは連絡を取っていない』（6月25日発売　週刊文春）

見城氏はここでも醜い嘘を塗り重ねていました。僕はこの日以降、出版の直前まで見城氏とメールのやり取りをし、見本が上がったときには見城氏と編集チームメンバーにお礼の手紙を添えて一冊ずつ渡しました。見城氏は文春の記者には『僕は読んでいないんだけど』などと話していますが、彼は確かに本を受け取り、「装丁も本文の構成も申し分ない。完璧だ」というメッセージもいただいています。しかし出版後、世間からの批難が殺到すると、見城氏は態度を豹変させ、靴に付いた泥を拭うように、僕との接点を〝汚点〟と見做して否定（注・し）ました。

本が出るまではあれほど熱心に出版を勧め、いろいろと取り計らい、「〝その程度のこと〟で諦めちゃうの？」と、僕を煽るようなことまで言っておきながら、今はもうこの本と関わったことさえ忘れたいというのでしょうか。自分だけ正義漢ぶって、よくここまで掌を返せるものです。

他者への執拗なまでの攻撃性

6月11日に手記が出版され、6月25日（注・十八日）に週刊文春に見城氏の独占インタヴューが掲載されました。

1月に出た週刊新潮の記事とは違い、それまでメールのやり取りをしていたにも関わらず、見城氏からも編集チームからも僕には何の連絡もありませんでした。それもそのはずです。もうこのときは前回とは違い、初めから確信犯的に僕を裏切るつもりだったのですから。

記事が出てから現在に至るまで、未だに事後報告さえありません。この2カ月余りというもの、僕は悲嘆に暮れていました。僕を使い捨てのオモチャだとでも思っているのでしょうか。相手はまともに物が言える立場の人間ではない、だから棄てるも傷付けるも自分たちの自由だ、とでも〉

ここから手紙は最終章を迎える。見城氏の〝人格否定〟が延々と続くのだ。

『絶歌』でみられた過度な修飾を用いた技巧的な文章は影をひそめ、Aは怒りを剝き出しにしている。

手紙の中には、見城氏の名誉を著しく毀損する表現も多々あるが、Aの他者への執拗なまでの攻撃性を詳らかにするために、敢えてそのまま掲載する。

〈見城氏はいろいろな場所でG（義理）N（人情）O（恩返し）こそが自分の信念であるとのたまっていますが、彼が〝GNO〟を貫くのはどうやら政治家、企業家、芸能人限定のようです。相手が物を言えない元犯罪者であれば、尻を拭って便所に流してしまえば一件落着というわけです。

君は現実の踏み絵を踏み

ついに酒鬼薔薇聖斗の正体を見た！

少年Aから本誌への手紙

抜いた。

共同体的な善悪の判断は別にして、三島由紀夫も奥平剛士も踏み抜いた。

僕は踏み抜けなかった。40年前のあの日、あの時、踏み抜くチャンスは幾らでもあったのに、踏み抜けなかった。

君は踏み抜いた上で生き残った。

そこには彼我の差があります。

僕はこの吐き気を催す現実世界と、いとも簡単に表面的なシェイクハンドができたのです。

つまり、僕はたべて苛酷にならない夢を今日まで生きたのです。

見城氏はメールで僕にこう書いてきたことがありました。

こんな蟻がたかりそうな甘ったるくて反吐が出るセンチメンタリズムに溺れながら、「365日外食です」などと自慢げに語り、タレントや政治家と仲良しゴッコに興じ美食に明け暮れていれば忘れられる程度の空虚感しか持ち合わせない者が、『異端者の快楽』などと片腹痛いです。

僕は愚かにも見城氏の書いた本を大真面目に間（注・真）に受け、彼のアウトローの美学に惹かれ、尊敬していましたが、宮本武蔵が『五輪書』を著すことで自らを高めようと試みたように、彼が本に書いていた大仰なことは、彼が「本当はこうありたい」と願う理想のセルフイメージだったんだなと、今にして思います。

彼は40年前と同じ、いやそれ以上に不細工なことをしました。〝表面的なシェイクハンド〟どころではありません。彼は吐き気を催す現実世界の前にいとも簡単に跪き、生まれてこの方この世のどこにも居場所がなく、ずっと異端として生きつづけ、彼の言葉を信じ、彼の著作に救いを見出し、彼に忠誠を誓った僕を生贄に捧げ、〝異物排除〟を連呼する共同体の靴に接吻するという、切腹ものの生き恥を晒したのです。そうすることで彼は僕だけではなく、彼自身の信念（もしそんなものがあったらの話ですが）をも裏切ったのです。

この悔しさがわかりますか？

かつては『心の父』と慕い、尊敬していた人物のみっともない醜態を見せつけられることほど辛いものはありません。

〝共同体からすべり落ちた者の切なさと恍惚にいつも身を寄せていたい〟？

共同体からすべり落ちた者を誰よりも差別し、搾取し、踏みにじって食い物にしているのは彼自身です。

僕が彼への手紙に書いた、『ずっと自分を蔑み、嘲り、排除しつづけた世界』の象徴が、他でもない彼だったのです。僕はとんだピエロでした。

クラスのイケてる連中と必死につるむことで自分もイケてると勘違いする輩がいますが、彼も必死に有名人とつながることでしか、容姿の醜さからくる劣等感や40年前に自分可愛さのあまり学生運動をリタイアした引け目を紛らわせなかったのだなと、少し哀れにも感じます。

そんな彼にとって〝少年A〟は「自分に箔を付けるための物珍しい奇怪なアクセサリー」だったのでしょう。

今頃は少年Aはあーだったこーだったと酒の肴にでもされているのかと思うと怒りの余り気絶しそうです。

自分の人を見る眼のなさに絶望します。一時でも彼を信じた自分を呪います。

見城さん、この僕の悔しさ、惨めさがあなたにわかりますか？

最後まであなたを信じ、礼を尽くし、感謝の意を述べて立ち去る者の背に唾をひっかけておきながら、『切なさと同時に安堵の気持ちがありました』（6月25日発売　週刊文春）などとよく言えたものです。何を泣ける美談にして一人で勝手に気持ち良くなっちゃってるのですか？　所詮あなたにとって「少年A」はそんな精神的オナニーのズリネタにすぎなかったのでしょうか。

太田出版の岡社長や落合（注・美砂取締役）氏のように、見城氏は本当の意味で「個」で勝負できないのです。

岡社長や落合氏は真に気高い出版魂を持った、エディターの鑑のような方々です。世間からの大バッシングの中にあっても、どこかの口だけの〝ファッション異端者〟とは違い、最後まで僕を裏切ったりはしませんでした。出版人としても、人間としても、岡社長や落合氏のほうが余程肝が据わっていますし、筋が通っていると思います。何よりお二方とも、人としての在り方が美しいです。

これが、『少年A「手記」出版　禁断の全真相　〝裏の裏〟』です。

ただ、経緯がどうであれ、最終的に出版を決意したのは僕自身の意志であり、その点に関して言い逃

青い光を前に半裸をさらす

次号9月24日号は9月16日（水）発売！定価400円です

れをするつもりはありません。失ったものも大きかったですが、本を出したことを後悔もしていません。それだけははっきり明言しておきます。

なお、今回貴社にこの文書を送付したのは完全に僕一人の判断です。太田出版は一切関係ありません〉

見城氏が本誌に証言した『絶歌』出版の〝真相〟を〈虚偽〉だと断言し、一方的に自身の見解を書き連ねたAからの手紙。それは真実を明らかにしたいという思いよりも、心酔した見城氏に裏切られた恨みが過度に強調された極めて感情的な文章である。

何より驚かされるのは、自意識、自己愛の過剰さと贖罪意識の決定的な欠如である。

Aは二人の幼い命を奪った殺人者である。少年法が適用されたことで、早期に社会復帰を果たし、匿名のままで日常生活を送ることを許されている。

まず彼がなすべきことは、些末な名誉回復などではなく、連絡もせず手記を出版したことを遺族に詫びることではないのか。三千万円を超える印税を手にしたはずだが、遺族への賠償金はどうなっているのか。手紙はそうしたことには一切触れていない。

事情を知る出版関係者は、こう証言する。

「Aは『絶歌』出版の経緯そのものも〝自分の物語〟だと思っているようです。Aから見れば、見城氏は、そこに〝嘘〟を交えて世間に流布させた人物ということになるのでしょう」

見城氏はAからの誹謗中傷に対してどう答えるのか。改めて取材を申し込むと、「今回は一切ノーコメント」と拒否された。

だが直後に、見城氏はトークアプリ755でこうつぶやいている。

〈今日は凹んでいます。国語力は人間力だと思ってますが、僕の言葉が不完全だったせいか、手痛い裏切りに遭いました。全ては身から出た錆、不徳の致すところです〉

〈関わってはいけない人というのはいるんですね。僕は何とか手助けしようと思ったのですが、全く通じていなかったようです。僕の国語力の足りなさですね〉

見城氏の知人が語る。

「見城氏は『Aの手紙は本物に違いないが、あまりに思い込みが激しすぎて相手にするに値しない。僕は何一つ自分に恥ずかしいことはない』と漏らしています。見城氏にしてみれば、四百万円以上の生活費を貸して執筆活動をサポートし、編集チームを作って、膨大なやり取りを経た上で、出版先も紹介した。やり取りの中で見城氏は、『生きたいと思う二人の人生を奪ったことをもっと真剣に考えなきゃダメだ。贖罪の意識がない』などとAに忠告していたが、そうしたことは一切書かれていない。あまりに一方的なAの攻撃に、恐怖さえ感じているようです」

Aの暴挙はそれだけではない。今回の手紙の中で、最も許しがたいのが最後のくだりである。

〈情報発信をしていく所存〉

〈最後に、重要なお知らせです。

いろいろ思うところがあり、急遽ホームページを開設しました。

無論、ホームページに関しても僕が誰にも相談せず一人で勝手にやったことであり、太田出版は無関係であることをお断りしておきます。

元少年A　オフィシャルホームページ
http://（略）

『存在の耐えられない透明さ』

まだ立ち上げたばかりで方向性も何も決まっていませんが、今後はこのホームページを基盤に情報発信をしていく所存です。

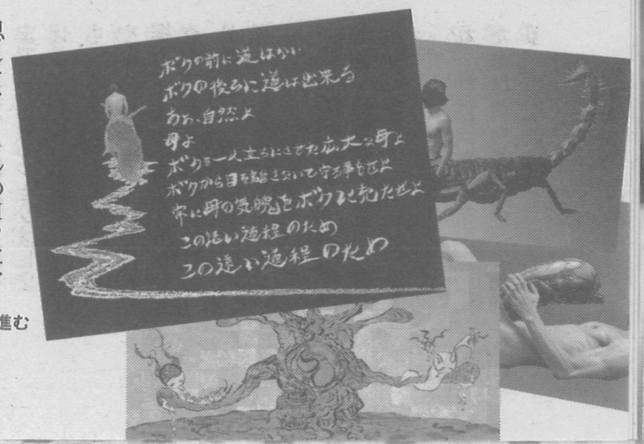
元　少年A〉

実際に記載されたURLを打ち込むと、フランスの作家ミラン・クンデラのベストセラー『存在の耐えられない軽さ』をもじったと思しきタイトルのHPにアクセスできる。

トップ画面には、Aが神戸家裁に移送された際、テレビ局に撮影されたサンダル履きの足元の写真が使われている。

なぜAはこのタイミングで〝公式〟HPの作成、告知に踏み切ったのか。大手紙出版担当記者が解説する。

「Aは幻冬舎で執筆している時から、自身のHPを作りたいと希望し、太田出版に移ってからもそうした意思を伝えていたようです。ところが両社から反対を受けたため、執筆中はHPの公開に踏み切ることはありませんでした。今回の突然の公開は、『絶歌』出版後は自由に情報発信を行っていく、という意思表明なのでしょう」



「遠い道程」をナメクジにまたがり進む

Aの異常なまでの自己顕示欲はこのHPにも横溢している。〈『絶歌』出版に寄せて〉という文章には、こんな宣伝広告のような記述がある。

〈少年A事件に関する書籍はこれまでにも数多く出版され、ほとんど出尽くしている感がありますが、少年A本人が自分の言葉で語ったものは、この『絶歌』が最初で最後です。（中略）事件から18年。『冷酷非情なモンスター』の仮面の下に隠された〝少年Aの素顔〟が、この本の中で浮き彫りになっています。

「少年Aについて知りたければ、この一冊を読めば事足りる」

そう言っても差支えないほどの、究極の「少年A本」です。

一人でも多くの方に手に取っていただければ幸いです〉

Aは、『絶歌』に対する批判には一切耳を閉ざし、自分だけのメディアで独りよがりの情報発信をスタートさせたのだ。

自らの個人情報の流出を極度に恐れる一方で、プロフィール欄には、こんな悪ふざけとしか思えない記述

ナメクジへの執着をHPで吐露

サイトの説明によれば、INFJ型とは、「寛容な口下手」タイプだという。

HP開設の意図について精神科医の影山任佐氏はこう指摘する。

「生きにくさを抱え、今後も異端者である自己を探求しながら表現者として生きていくというAの決意の現れでしょう。

事件当時は被害者の首を校門前に置くことがAにとっての〝作品〟でした。自分が異端で害虫だということをいいながら、世間に認めてもらいたいという矛盾した感情を持っています。マスコミにHPを知らせるというのは自己顕示欲を遠慮なく発現していこうということでしょう。『絶歌』騒動も最近は収まりましたから、更なる注目を浴びたいのではないか」

表現者としてのAの歪んだ自意識が最も如実に表れているのが、セルフポートレートだ。なんとA本人とおぼしき人物のオールヌードの〝自撮り写真〟が掲載されているのだ。

月と太陽のイラストを背景に上半身裸のAがたたずんでいる写真では、六つに割れた、鍛え抜かれた腹筋が強調されている。

全裸写真は全部で三枚。一枚は局部にエイリアンのような物体が取り付いている。『絶歌』でも触れた、射精時の痛みを表現した写真と思われる。また一枚は、全裸で膝を抱え込んだAが胎児のように丸まっている写真。そして最後は、高村光太郎の詩「道程」の一節をほぼ引用した白抜きの文章の横で、全裸のAがナメクジにまたがり、ぬめった軌跡を残しながら、〈遠い道程〉を進んでいる写真だ。

ナメクジは、Aの起こした事件を振り返る上で、極めて重要なキーワードだ。

〈不完全で、貧弱で、醜悪で、万人から忌み嫌われるナメクジは、間違いなく僕の「心象生物」だった〉（『絶歌』より）

『絶歌』の中では、ナメクジの解剖にのめり込む様子が生々しく描かれている。その性的サディズムの対象がナメクジから猫、そして人間へと移っていったのだ。

他にも〈ギャラリー〉の中では、ナメクジをモチーフにした作品が〈お気に入り〉として紹介されている。ナメクジを用いたハート型の作品にはわざわざ〈メイキング〉と題した文章が掲載されている。

〈「ナメクジを使って寄せ絵をやったらどうなるか見てみたい」と思って実際にやってみた〉

〈近所にナメクジがよく獲れるスポットがあったのですが、雨が降るたび僕はピンセットとガラス瓶を持ってそこへ行き、壁ゆくナメクジを片っ端からスカウトしました。（中略）トータルで100匹はくだらないかと思います。もちろん、シャッターを切る際は、「いいねぇ～キミ、その触覚セクシーだよ」「今日は一段とヌメってるね」「そうそう、もっと呼吸孔を目いっぱい拡げて」

と、彼らのモチベーションを上げるための声掛けも忘れてはいけません〉

精神病理学者の野田正彰氏はこう分析する。

「彼は〝シンプルな完全な嫌悪感の対象〟である、ナメクジになりたいのでしょう。HPではナメクジに塩水をかける描写もありますが、彼のサディズムを感じます。自分の鍛え上げられ

元少年A
ついに酒鬼薔薇聖斗の正体を見た！
少年Aから本誌への手紙

次号9月24日号は9月16日（水）発売！定価400円です

た裸の写真を公開しているのは男らしさを誇示するためと見られます。『強い俺が子宮のような生命を性的に支配して殺していく』という宣言なのではないでしょうか」

〈レビュー〉で公開されている文章からも、Aの暴力性は窺い知ることができる。最も多くの紙数を割いているのは、「パリ人肉事件」の犯人である佐川一政氏の作品についてである。

〈『絶歌』を書くにあたって、僕は〝或る人物〟の存在を強く意識していた。同郷の〝異〟人、『佐川一政』である〉

Aは〈Re：佐川一政様〉として、佐川氏への熱烈なメッセージも記している。

〈僕も最近、自分を表現すること、切り刻んでさらけ出すことの苦悶と快楽を憶え始めたところです。あなたが「芸術とは失われたものへの郷愁である」というなら、僕にとって〝芸術〟とは、「失われた〝現在〟への求愛」です。僕にそれを教えてくださったのが、あなたです〉

前出の野田氏が語る。

「佐川氏について〈憧憬の念〉という表現を使っていますが、今後、Aも彼のようになりたいと願っているんでしょう」

Aは自身のメールアドレスもHP上に公開している。

〈拙著『絶歌』や当ホームページに関するご意見、ご感想、ご質問等は下記アドレスまで〉

本誌記者はこの手紙が届いた後、本人確認及び取材依頼のため三通のメールをAに対して送っている。送信エラーはなく、Aに届いているようだが締め切りまでに返信はなかった。

既に紹介した〈ホーム〉欄には、情報発信についてこう記載されている。

〈今現在、『元少年A』の情報発信は当ホームページ『存在の耐えられない透明さ』一本に絞っています。

僕がこのホームページ以外の場所に、一文字でも何か書き込む場合は、必ずここで告知しますので、その旨ご承知おきください〉

「心象生物」と語るナメクジがモチーフ

Aの醜形恐怖症と胎内回帰願望を暗示？

両親は「ご遺族に申し訳ない」

今後は自由に情報発信していくと高らかに宣言しているのだ。こうしたAの動きについて太田出版に問い合わせたが、

「弊社はなんの関与もしていません。特にお答えすることはありません」

と回答するのみだった。

いずれにしても、HPに掲載された作品からは、かつての事件で指摘された暴力的な性向とサディズムがいまだに濃厚に感じ取れる。

Aが入所した関東医療少年院では犯罪の原因となった「性的サディズム」や「反社会的価値観」などの要素を克服するため、擬似家族による更生プログラムが実施されていた。

果たして関東医療少年院での更生プログラムは成功したといえるのだろうか。

前出・野田氏の解説。

「医療少年院での『育て直し』は全く成功していません。彼は育て直しが成功したかのように装って、関係者を騙したのでしょう。

彼は『お前ら、私のことを理解できないだろう』と嘲笑って事件を起こしました。そして今回、更生プログラムを担当した医療少年院の職員のことも嘲笑ったわけです。このHPは『私の本質はこういうもので、お前らが簡単に触れられるようなものではない』という宣言に他なりません。

HPの絵から読み解けるのは、Aには倫理観がなく殺したことを悪いと思っていないということ。子供を殺したことについて反省する気持ちや可哀想に思うイメージは、絵からは一切伝わってきません」

手紙の内容やHP開設を、Aの両親や被害者遺族はどう受けとめるのか。

Aの両親の代理人弁護士の言葉には無念がにじむ。

「この手紙には、被害者遺族との関係を思い悩んだ形跡がない。被害者のことなど何とも思っていないんじゃないでしょうか。特に問題なのがHPです。事件から何も変わっていないと言われても仕方がない。

これまで書いてきた手紙も結果としてはすべて遺族を欺いたものだったと言わざるを得ない。Aなりにいろんな本を読み、遺族の心情を見透かし、こう書けば遺族はこう思うだろうと想定して騙してきたんでしょう」

Aが遺族に宛てた手紙の文面に、明らかな贖罪の意識が表れ始めたのは三年前だったという。それはAが『絶歌』出版を見据えて見城氏に接触を図った時期と一致している。

ついに酒鬼薔薇聖斗の正体を見た！

少年Aから本誌への手紙

「『絶歌』発売以来、最悪の結果としてこういうこともあり得るのではないかと危惧していました。Aは自己顕示欲の強さを隠すことをもうやめたんでしょう。自分を見世物にして、遺族も含め、事件を売り物にして生きていくという選択をしたということです。

Aの両親にも知らせましたが、『絶歌』の時から何がどうなっているのか全く分からず、非常に困惑しています。ひたすらご遺族に対して本当に申し訳ないと。

そろそろ太田出版を通じてA本人に出版の真意を問い質すべく、会う機会を作るよう申し入れをしようと考えていたところでした。直接会ってこうした動きを止めたかった……」（同前）

本誌は、遺族にもAからの手紙やHP開設について、関係者や手紙を通じて連絡した。返答はなかったが、遺族の知人はこう語る。

「遺族は今年の命日にAから届いた手紙を読んで『本当に反省しているのかな、信用していいのかな』と思っていた。その矢先に『絶歌』出版を知らされた。

これまで届いた謝罪の手紙を見ながら、どこか騙されているのではないかという思いを払拭できないでいた。今年は信じようと思い始めたところだったんです。時間を掛けて遺族を信用させ、手のひら返しをしてそれをぶち壊したということです。

Aは人の感情を意図的に操作して、二度殺人を犯したようなものです」

『「少年A」14歳の肖像』を著した作家の高山文彦氏は、こう総括する。

「手紙とHPにより、何の反省も悔恨もないことが明らかになりました。精神鑑定で指摘された極端に自己中心的な認識論『独我論』から抜け出せていない。酒鬼薔薇聖斗の幻影から一歩も脱していないのです。いまのAの状態は犯罪者を野放しにしているようなものです。彼は『絶歌』を書くことで家族プログラムで母親役を演じた女性医師との関係を自ら断ち切りました。その段階で、これまでの贖罪を行っていた生活を捨てたのです。

『絶歌』により彼はこの世にもう一度復活を遂げ、そしてますますこの世の中で脚光を浴びようとしている。しかし狡猾にも表には決して出てきません。彼は自分が起こした事件を、三十歳以降の人生を生きていくための大きなセールスポイントにしています。

再犯の可能性は大いにあるでしょう。彼は少年殺害などで逮捕された時に死刑になると思っていた。やり遂げたという達成感に満ち溢れていたんです。そこで自分が死刑になれば本望だった。ところが生き続けなければいけなくなって、ストーリーに狂いが生じた。彼はあの時以上の達成感、絶頂感を求め始めたのだと思います」

高山氏の指摘するように、今回の手紙には次のような記述がある。

〈かつて己の全存在を賭して

幼い牙で必死に咬みついたこの世界に

ものの見事に懐柔されズルズルと生きながらえてきた自分を本当は恥じているのだろう？

有無を言わせず権力によって抹殺される程の脅威になれなかった自分を

心のどこかで恥じているのだろう？〉

事件から十八年を経たいま、『絶歌』出版に懲りることなく、自分勝手な欲望を満たすため遺族を傷つけ続けるA。彼はどこでどんな生活を送っているのか。

本誌に届いた手紙の消印は「八月二十九日　岡谷」。現在、都内に居住しているとみられるAが、長野県の岡谷郵便局からこの手紙を郵送したと思われる。またDVD-Rに保存されたワードファイルの「更新日時」は八月十九日十九時四十九分となっており、手紙の完成から十日を経て郵送したことになる。Aは同じ手紙を「週刊新潮」、「女性セブン」、朝日新聞などにも送っているという。

Aは、一九九七年、二人の児童を殺害した後、神戸新聞社に犯行声明の手紙を送った。そこでは、こう綴っている。

〈最後に一言

この紙に書いた文でおおよそ理解して頂けたとは思うが、ボクは自分自身の存在に対して人並み以上の執着心を持っている。よって自分の名前が読み間違えられたり、自分の存在が汚される事には我慢ならないのである〉

今回の手紙にも、こんな記述がある。

〈したり顔の見も知らぬ赤の他人に様々なかたちで蹂躙され、搾取されてきた自らの物語を、自らの言葉で奪い返さないことには、私は前にも後ろにも横にも斜めにも一歩も動き出すことができないのです〉

そして、Aは『絶歌』を出版し、「公式」と冠するHPを作った。そこから滲み出るのは、犯罪者として獲得した「少年A」という称号への強烈な執着である。

いまもこの国のどこかで何食わぬ顔でHP制作に没頭している「元少年A」は、日本犯罪史上に残る凶悪事件を引き起した十四歳の「少年A」から何一つ変わっていないのだ。

次号9月24日号は9月16日（水）発売！定価400円です